

江戸の蘭学者 文政期『医家人名録』の分析から

海原亮

Rangaku Scholars in the City Edo

はじめに

①文政期江戸における都市「医療」の実態

②江戸市中の蘭方医
おわりに

[論文要旨]

本稿は、文政二・三年（一八一九・二〇）に刊行された医師名鑑『江戸今世医家人名録』を素材として、巨大都市江戸に達成された「医療」環境の実態を、蘭方医学普及の動向に即しつつ明らかにしたものである。

①では、『江戸今世医家人名録』の構成と特徴、刊行の目的について考察した。近世期における医師名鑑とは、第一に、都市民衆が医師を選択する最も簡便な手法であつた。同書はまた、医師が販売する家伝薬の宣伝・広告機能をも有した。一七七〇年代頃より学問的な体系の面では蘭方医学の興隆がみられたが臨床の場にそれが流布するまでにはなお時間が必要であった。蘭方医学を由緒とする売薬・治療方法も掲載されたが、その数はわずかなものに止まっている。

タをもとに、各種の著名蘭学者の門人帳と対照し、その傾向を考察した。今回は、時

期も区々な五つの門人帳（土生玄碩・華岡青洲・大槻玄沢・伊東玄朴・坪井信道）に限定し、その結果を網羅的に紹介した。照合作業に際しては名鑑類の史料的性質を考慮し、複数の材料を用いて慎重に判断した。

本稿に紹介したデータは、江戸における「医療」環境の実態を解明する基礎的な作業と言えるものである。すなわち、文政期頃の江戸では、蘭方医学の素養を有する医師が活動の場を持ち得る社会的基盤が醸成されはじめていた。本稿の最大の論点は、当時の江戸が抱えていた特殊な社会事情『医療』環境の独自性の指摘である。それはまず、藩医層の圧倒的存在であった。彼ら藩医の少なくない部分は、實際には藩邸の外に居所を得て、町内で診療活動を展開した。したがって、巨大都市に独特な社会構造や医師たちの存在形態を精確に踏まえてこそ、「医療」環境の特質・蘭方医学受容の背景は、より鮮明に性格規定される。